

生物資源科の3氏が受賞

エリスリトールに着目 春見教授が学会賞



春見教授

生物資源科学部生命化学科主任の春見隆文教授が9月20日、東京都府中市で開かれた平成24年度日本応用糖質学会の総会で、「微生物・酵素を活用した糖質の開発と利用に関する基礎的研究」で学会賞を受賞した。

春見教授は自然界に微量しかいないエリスリトールに着目して、その生産菌の培養から発酵生産を進め、ゼロカロリーの天然甘味料として注目されるエリスリトールの用途開発まで一貫した研究を行った。

日本放線菌学会の 浜田賞が高野助教に



高野助教

日本放線菌学会の平成24年度総会が9月6日、東京都府中市で開かれ、生物資源科学部応用生物

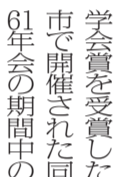
科学科の高野英晃助教が「放線菌が示すストレス応答制御の分子機構に関する研究」で、40歳以下の優秀な若手研究者に贈られる浜田賞を受賞した。

高野助教はバクテリアにも光感知する能力が備わっていることなどを明らかにし、放線菌の機能を光でコントロールしつつ、抗生物質など有用な物質を作る方策への道を開いた。

森林管理技術賞で 垂水さんに特別功労賞

平成24年度全国大学演習林協議会の秋季総会が9月20日に京都大学で開

催され、生物資源科学部水上演習林の垂水秀樹さんが、森林管理技術賞3部門の内、特別功労賞を受賞した。同賞は大学演



垂水さん

習林などの技術職員を対象にしたもので、垂水さんは長年にわたる水上演習林の適切な森林管理と学生への教育指導の貢献が評価された。

文理学部の菅原正雄教授(分析化学)が研究論

文「生体チャネルの増幅機能および電気化学測定を基盤とする高感度センシング法の創成とバイオ分析への応用」により2012年度日本分析化学学会賞を受賞した。金沢市で開催された同学会第61年会の期間中の9月20日、授賞式が行われた。

菅原教授は、ペプチドやホルモンといった生体関連物質の検知法の高感度化を目指し、多量のイオンを透過させるチャネル物質を利用した方法な

ど独創的アイデアを駆使して電気化学や光を用いた高感度なセンシング法を開発。それによってこれまで適切な測定方法のなかった生体内の神経伝達物質などの高感度検出を可能にしたことが分析化学の発展に大きく貢献したと認められた。

菅原教授は「このようにな立派な賞がいただける光栄に思う。私ひとりの力では得られなかった成果で、いろいろな面で協力し、支えてくれた研究室の学生たちに感謝している」と喜びを語った。

心理臨床センターが地域の子育てを支援

文理学部心理臨床センター(センター長・津川律子)大学院心理学専攻教授が、地域貢献の一環として子育てを支援する活動「桜っ子カフェ」を開催している。0歳から

3歳までの乳幼児と親のためにサロンのような場を設け、心理臨床センターの臨床心理士や大学院生らが運営を担っている。地域の17組36人の親子が参加登録し、百周年記念館多目的ホールを会場に9月21日、活動がスタート。参加費は無料。今年度は月2回ペースで来年度は月3回ペースで来年度は月3回ペースで計12回実施の予定。

参加者への配慮から活動は非公開。運営責任者の菊島勝也大学院心理学専攻准教授によると、子どもたちは前半に大学院生との自由遊び、後半はお遊戯など集団で遊ぶプログラムを実施。その傍らで、保護者同士お茶を飲みながら子育てについて語り合い、臨床心理士からは子育てのアドバイスが受けられるという。菊島准教授は「予想を大幅に上回る参加申し込みがあり、期待の大きさを感している。普段乳幼児連れで外出できる場所も少ないので参加してよかった、といった声を聞く」と話した。

菅原教授は、ペプチドやホルモンといった生体関連物質の検知法の高感度化を目指し、多量のイオンを透過させるチャネル物質を利用した方法な

研究拠点づくりに向けた文理学部の研究プロジェクト、私立大学戦略的エクスト、私立大学戦略的研究基盤形成事業「構造制御および電子状態制御に基づく新物質の開発」(プロジェクトリーダー

小林昭子)化学科教授)の学内報告会が10月18日、同学部で行われた。浅地哲夫化学科教授が、化学、物理、物性生

この新物質は金属有機ペロブスカイト(灰チタニウム)型化合物と呼ばれ、物質群に属し、極めて高い誘電率を示す。浅地教授は、結晶中の有機陽イオンの分子運動をNMR(核磁気共鳴)で調べ

知財戦略テーマに法学部で講演会

大きな転換期を迎えた知財戦略をめぐり公開講座が10月10日、法学部で開かれた。平成22年4月に開校した日本大学知財専門職大学院と国際知財研究所の共催で、「知財と金融が融合する『知の攻防』の新展開」と題して、同大学院の岸宣仁講師が講演。同大学院の教

な知財インフラを整備し、新たなビジネスモデルを構築していくべきか、今こそ大胆な発想の転換が求められる」と訴えた。

生との自由遊び、後半はお遊戯など集団で遊ぶプログラムを実施。その傍らで、保護者同士お茶を飲みながら子育てについて語り合い、臨床心理士からは子育てのアドバイスが受けられるという。菊島准教授は「予想を大幅に上回る参加申し込みがあり、期待の大きさを感している。普段乳幼児連れで外出できる場所も少ないので参加してよかった、といった声を聞く」と話した。

山中教授のノーベル賞受賞に想つ

医学部教授 松本 太郎



松本太郎

ノーベル賞医学・生理学賞の山中伸弥教授のiPS細胞は、再生医療や創薬に新時代を拓く発見だった。日本でも脂肪細胞を人工的に未熟化した脱分化脂肪細胞を用いて骨、血管、心筋などの再生医療に応用する研究が、医学部・松本太郎教授と生物資源科学部・加野浩一郎准教授の手に進んでいる。松本教授に山中教授の受賞のインパクトを綴ってもらった。

山中教授は、この初期中に重要な因子の探索を行い、結果的に4因子を組み合わせて導入することで初期化できることを発見した。つまり、核移植より単純でさまざまな分野へ応用可能な初期化法を確立したことに意義

ルまで成長させた。すなわち成熟細胞を初期化できることを証明し、また卵細胞の中に初期化を可能にする因子が存在することを確定的にした。山中教授は、この初期中に重要な因子の探索を行い、結果的に4因子を組み合わせて導入することで初期化できることを発見した。つまり、核移植より単純でさまざまな分野へ応用可能な初期化法を確立したことに意義

初期化できる」という確固たる信念があったからに違いない。受賞できた理由を聞かれたとき山中教授は「あきらめずにやり続けること」と「チーム協同性」と「強い信念に基づいて真実を探求する」を強調された。しかし、もう一つ大切なこととして「強

い信念に基づいて真実を探求する心」があった。また研究員の雇用を継続するために自らマラソンに出場、資金を募るといった「リーダーとしての資質」の高さにも感服するばかりだ。おかげで「忙しい」な博士との共同受賞は「運動ができない」な

私事で恐縮だが、私にとって山中教授は、同年齢で研究領域も似ており、身近なお手本の存在である。この細胞を育てて力エ



60周年記念棟の地鎮祭を挙げる
生物資源科学部

生物資源科学部の「60周年記念棟」(仮称)新築工事の地鎮祭が10月13日、河野英一学部長や古屋尚常務理事ら本学の教職員や建設関係者が参列